

土木学会選奨土木遺産
水の都広島を象徴する

きょうばしがわ がんぎ 京橋川の雁木群



平安時代末頃、安芸国北部の年貢は太田川沿いまで陸路で集められ、そこから川船で太田川河口まで運ばれました。また広島城の築城時には資材も可部から舟で運ばれています。江戸時代になると、さらに上流まで開削が行われ、通船区間は寛永年間で加計まで、幕末には戸河内まで延びていました。

輸送物資は年貢米・木炭・割木・紙・鉄などのほか、材木を運ぶ筏流しも行われました。こうして、太田川は飲み水・農業用水だけでなく、舟運によって広島デルタで暮らす人々の暮らしを昭和初期まで支えてきたのです。

海沿いの町とりわけ瀬戸内海では、潮汐の干満差があります。特にその差が大きいのが広島、呉、岩国です。この干満差の大きい地域での舟運を支えたのが荷揚げのための階段、いわゆる雁木です。福島正則の遺作となった下蒲刈の福島雁木は、今では元の2分の1に縮小されたため、輦の浦の大雁木の3分の1しかありませんが、広島県内では最も古いものです。

旧太田川、京橋川、元安川、天満川、猿猴川、太田川放水路という6本の河川が流れる「水の都・ひろしま」には、約400個所の雁木があります。このなかには楠の大雁木のように物流の中心的役割を担った大規模なものもあり、それらは公共的性格も強く、親水空間として市民の憩いの場となっています。

一方、川に面した商家では各家に雁木が設けられていたのでしょう。規模や石積みの工法、階段の向き、石の表面加工など、多様な雁木が並ぶ水辺は、日々の暮らしが川に向けられていた証でもあります。なかでも明治から大正にかけて築造された石積み雁木——裏木戸や船をつなぎ止める鉄環などの痕跡が残っている雁木が、京橋川右岸沿いで見られます。

このように水辺と暮らしの結節点であった雁木は、全国最大規模の河川舟運用雁木群であるとして、平成19年度土木学会選奨土木遺産に選定されました。

■位置図



川から上陸する際の勝手口として裏木戸を付けた雁木



雁木



雁木



舟をつなぎとめる鉄環



京橋川の雁木群

現在判明している限りにおいて全国最大の河川舟運用の雁木群で、特に京橋から栄橋の間には様々な造りの雁木が約20mおきに残る。